

Title	タラス戦考：本章
Sub Title	The battle of the Talas : main chapter
Author	前嶋, 信次(Maejima, Shinji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1959
Jtitle	史学 Vol.32, No.1 (1959. 4) ,p.1- 37
JaLC DOI	
Abstract	<p>This chapter begins with the activities of Su Lu, Khaqan of Turgesh Turks. He engaged in successive battles for about sixteen years with the Arabs on one side and with the Chinese on the other. But, after he was murdered by Baga Tarkhan (Kursul) in 738, the Turgesh Turks splitted into two parties, Black (Kara) Turgesh and Yellow Turgesh. At first, the authorities of T'ang dynasty supported the yellow party, but afterwards changed their policy and helped the black party. The battle of the Talas between the Arabs under Abbasid Caliphate and the Chinese of T'ang occurred amid the Turgesh territory in 751 after the expedition of Chinese frontier general Kao Hsien-shih to Shash (present Tashkent in Tajik SSR). However, as to the reason why the Chinese gave such a chastisement on the king of Shash, the descriptions of Chinese historians do not coincide with those of Arab chroniclers. The Chinese sources say that general Kao punished severely the king of Shash because the latter neglected the duty as a subordinate state. Ibn al-Athir, Arab historian in the 13th century, stated that the king of Farghana came into conflict with the king of Shash, the former asked for aid to the Emperor of China who sent a large force to besiege the capital of Shash and that Abu Muslim dispatched one of his generals to rescue the besieged. In my opinion, both of these records, Chinese and Arab, are not sufficient to explain the real cause of the accident. I think that Kao Hsien-shih punished the king of Shash because the latter was the most fervent helper of Yellow Turgesh, while the policy of T'ang at that time was to support the other Black Turgesh.</p>
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19590400-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19590400-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# タラス戦考

— 本章 —

前嶋 信次

## 一、突騎施可汗蘇祿

序章にのべた如く、唐朝・吐蕃・大食の三大勢力がパミール高原一帯をめぐって微妙な鼎立を續けていたとき、更に第四の強大な勢力が出現して、これらとからみあった。それは西突厥の餘衆を統合した突騎施可汗蘇祿の國家である。この一代の偉材の事蹟をこまかく考察したならば、更に相當の紙數を要するであろうが、ここでは本論に必要なことにみに限定することにした。

突騎施 *Türgesh* は唐書突厥傳にいわれた如く、西突厥の屬部の一つで、チュウ河とイリ河との中間のステップで遊牧生活を送っていたが、<sup>(1)</sup>西突厥の衰微後、次第に強勢となり、烏質勒がこれをひきいるに至つて、本據を碎葉 *Suyāb* とつし、イリ河畔には第二の根據地をおいた。つまり、その主力は西方に進出し、もとの西突厥の可汗の牙帳のおかれたあたりにおいて、睨みをきかせたのである。それは大體、唐の中宗の治世時にあたり、<sup>(2)</sup>則天武后の聖曆二年（六九九）にその子遮弩を長安に派遣し、則天武后から瑤池都督を授けられている。

烏質勒の死後、その子娑葛がついだが、その頃は勝兵三十萬と稱せられた。ただし唐書突厥傳によるに、新可汗は弟娑弩（遮弩）と不和となり、兩者相戦つたため東突厥の默啜のため攻められ、結局、二人とも殺された。舊唐書突厥傳

(卷一九四下)はこの事件を景龍三年(七〇九)に、通鑑(卷二一)は玄宗の開元二年(七一四)にかけている。東突厥が突騎施を討ったことがオルホン碑文にも現れていることは、ここに詳記するまでもない。そのあとの混亂に乗じて興ったのが、同じく突騎施の車鼻施部の噶(官名)であった蘇祿である。ついに可汗と號し「よくその下部種を撫循し、ようやく衆を合して三十萬に至る。ここにおいてまた西域に雄たり」(新唐書二一五下)とあるが、通鑑(二一一)には開元三年(七一五)の條に「この歲、蘇祿をもって左羽林大將軍、金方道經略大使となす」と、また翌開元四年八月の條に「突騎施蘇祿、また自立して可汗となる」とある。唐朝はしきりにこの人物を懐柔しようとした如くであるが、間もなく、とても一筋縄ではいかぬ難物であることを思い知らねばならなかった。通鑑開元五年五月の條には「突騎施酋長左羽林大將軍蘇祿は部衆ようやく疆し。職貢乏しからずといえども、邊を窺うの志あり。五月、十姓可汗阿史那獻、**邁羅祿 Qarluq** の兵を發して、これを撃たんと欲す。上許さず」とある。冊府元龜(一五七)全唐文(四〇)などには、この際の玄宗の諭書が再録されていて、もう少し詳しい事情がわかるが、蘇祿討伐を獻策したのは阿史那獻と安西都護の郭虔瓘とであった。すでにこのころ蘇祿の勢力は安西を脅かすに十分であったが、玄宗は王惠というものをつかわし、帛二千段の外もろもろの器物などをおくってこれをてなづけたいと云っている。

王惠がまだ出發せぬうちに、早くも蘇祿と唐軍の衝突が起ってしまった。通鑑のその年七月の條に「安西副大都護湯嘉惠の奏するには、突騎施は大食、吐蕃を引いて四鎮を取らんと計り、鉢換および大石城を圍む。すでに三姓**邁羅祿**の兵を發し、阿史那獻とともにこれを撃つ」とある如くである。この際、宰相の宋璟と蘇頌とが上奏し、「突騎施の來襲にあたり、カルルクなどがこちらに協力して戦うのは、これ夷狄相攻めるもので、朝廷の遣わすところではなし、もし大は傷き小は滅すというような結果になっても、唐朝はこれによって利をうけるのみであるから、放任しておいた方が

よい。王惠の使節行についてはすでに最初の懐柔目的は時おくれであるから、もう少し情勢の推移を見てから、更めて考えた方がよいと思う」という意見をのべたことが、冊府元龜（卷九九二）に出ている。またこのとき、蘇祿を助けて安西に寇した大食兵については、ギップ教授は、これらはアラブ人のうち傭兵となったものであるという意見を出している。<sup>(四)</sup>その後、この衝突はどうなったものか、こまかい記録がないのでわからぬが、ここで注意すべきは、同じくイリ地方にいたカルルク族が唐を助けて、突騎施と戦ったという事実である。

これから以後も蘇祿は、或時は唐と和親を固くして、アラブ軍と戦うかと思つと、吐蕃や東突厥から妻を迎えて唐に反抗したりなどし、縦横の機略をたくましくして、いずれか一つの強國とのみ結ぶというようなことはなかつた。恐らく、その夢は、全盛時代の西突厥王國のような中央アジア一帯にわたる大國をうちたてることであつたのであろう。

開元七年（七一九）二月には、中央アジアの俱蜜國（Qunedi 今の Karategin）康國（Samargand）安國（Buk-hara）等の王たちが玄宗に援助を求めてきた。通鑑（卷二二二）には「大食の侵掠するところとなつたので、兵の救援を乞うた」とある。この際の、俱蜜王那羅延 Narayana、康國王烏勒伽 Ghirak、安國王篤薩波提等の上表文が冊府元龜（卷九九九）にのせてあるが、そのうち安國王のものには、次のような一節がある。「このごろ、大食賊に毎年侵擾され、國土は寧きを得ず。伏して乞う、天恩慈澤、臣の苦戦を救いたまえ。すなわち勅を突厥施に下して臣等を救わしめんことを請う。臣はたちまち本國の兵馬を統領し、（援軍と）會を計り、翻つて大食を破らん……」。しかし玄宗はこの救援を「許さず」（唐書西域傳康國の條）とあるし、俱蜜國に對しては「ただ慰遣せしのみ」とある。

しかしアラブ史料によると、突騎施可汗はこのごろから猛烈な勢で南下し、アラブ軍と戦いはじめているから、中央アジア諸國の求援はこの方面にも行われ、それに應じて立つたことが想像される。或は唐の天子から、そのような獎勵

もあつたかも知れない。唐にして見れば、蘇祿の鋒先が、東に向わずして、アラブ軍にむけられるのは決して不利ではないからである。タバリーによれば、回曆一〇二年（七二〇年七月—七二一年六月、開元八—九年）にはチュルクの可汗 Khāqān al-turk の將クル・スール Kūr-sūl が一軍を率いてソグディアナに入り、フラサーンの新太守サイード Sa'īd Khudhainah に叛いて蜂起したその地方の反軍を助けた。土着の君長等も殆どみなこれに應じ、しきりにアラブの鎮兵を破ったので、サイードは自ら兵をひきいてこれらと戦ったが敗れ、サマルカンド附近に籠城してしまつた。しかしチュルク軍はこれを攻めるに十分な兵力を持たなかつたので、やがて退いたとしてある。<sup>(五)</sup>

蘇祿がソグディアナに軍を送り、アラブ軍と戦うに至つたという記録は、右の條が一番古いものと思われる。通鑑（卷二二二）には「開元六年五月辛亥、突騎施都督蘇祿をもつて左羽林大將軍順國公とし、金方道經略大使に充つ」とある。同書にはすでに開元三年の所にも同様の記事があるが、恐らく開元六年にかけた條の方が正しいのであろう。同じく開元七（七一九）年十月壬子の條にも「突騎施蘇祿を冊拜して忠順可汗となす」とある。これは唐が、このように蘇祿を優遇しつつ金方道經略大使などの名の下に、兵をソグディアナに入れるよう促がしたためではあるまいか。ギッブ教授は「蘇祿はソグディアナの君長たちから援兵を求められたとき、唐の勢力に逆らつて東方に勢力をひろげることの出来ないことを覺っていたので、西南方に勢力を延ばすべきこの好機會を擲んだものであろう」という意見を述べている。<sup>(六)</sup> それにしても、ソグディアナからアフガニスタンにかけては、西突厥の全盛期にはその支配下にあつた地域である。西突厥の餘衆に君臨することになつた蘇祿として、このような機會に蹶起することはきわめて自然の勢の如く思われるのである。

して見ると、これから後、華々しく展開された蘇祿とアラブ軍との爭覇戰の裏には、唐朝もまたその使曠者としての

一役を果していたと見てよいであろうし、アラブ側としてはチュルク可汗（蘇祿）の背後に唐の天子の壓力のあるのを感じていたかも知れない。この考えを裏書するものとして、開元十五（七二七）年に吐火羅葉護が玄宗に送った上表文（元龜九九九）がある。その中に「……奴身はいま大食の重税を被り、欺苦實に深し。もし天可汗の救活を得ずば、奴身は自ら活くことを得ず、國土は必ず破散に遭わん。天可汗の西門を防守することを求めらるるとも、なし得ざらん。伏して望むらくは、天可汗の慈憫なる、奴身に多少の氣力を與え、活路を得さしめよ……。」といい、その後には續けて「又承天可汗處分突騎施可汗云、西頭事委備、即須發兵除却大食。其事若實、望天可汗却垂處分。奴身緣大食稅急、不救得好物奉進云々」としている。これは大體、「唐天子の支配下にある突騎施可汗のいう所によると、唐天子には『西邊のことは汝に一任するから、須らく兵を發して大食を除きしりぞけよ』と御命じになったとのことであるが、そのことが事實ならば、何とぞあらためてその實現を計って頂きたい。何分にもアラブから重税を課しはたられ、これといって奉進すべき好物も残し得なかつたのは残念に思う」というのであろう。

## 二、蘇祿の全盛時代

開元十二（七五三）年になると、フラーサーンの太守ムスリム・ビン・サイードはソグディアナからフェルガーナに兵を進めて、その首府を圍んだ。この報に接した突騎施可汗（蘇祿）は大舉出動し、アラブ軍中であつたサマルカンドの王グーラク（烏勒伽）の弟を殺し、敗走する敵を追つて、シャーシュ（石國）やフェルガーナの軍と呼應しつつ、スイル河畔で大勝を得た。アラブ軍は辛うじてサマルカンドに退くことが出來たが、アラブ史家はこの戰を「渴きの日」<sup>(七)</sup> Yaum al-'atash と呼んでゐる。

アラブ族の中央アジア征服はこの敗戦で大頓挫を來し、これから十五年間は積極的作戰に出ることなく、かえって徐々にアム河北の地域から驅逐されることになったが、これは同時に突騎施可汗蘇祿にとっては得意時代であったのである。次に、この間におけるそのアラブ軍との衝突をきわめて簡略に記すことにしよう。

回曆一一〇年(西曆七二九年四月一七三〇、四。開元一七一一八)にはソグディアナの殆ど全域に亘る反亂が起つた。蘇祿はこれに應じて南下し、アラブ軍をアム河以南に殆ど一掃し去つた。しかしサマルカンドと附近の小城二つのみはアラブ人が維持していた。フラーサーン太守アシュラス Ashras b. 'Abdallah as-Sulamī はフラーサーン全土から兵を集めて、アム河南岸のアームルに陣を張つたが、對岸の突騎施軍に壓倒され、三カ月間も渡河することが出来なかつたばかりか、かえつて突騎施軍の一部がフラーサーンに侵入した程であつた。その後、やっと渡河し得たアシュラスはパイカンドからブハーラーへと苦戦しながら進んだ。蘇祿はブハーラーからサマルカンドへ退く途中、後地の西方にあたるカマルジャ Kamarjah 砦を圍んだ。このとき、蘇祿の軍中にはサマルカンド王グーラクの子、ペルシャ皇帝ヤズディギルド三世の孫<sup>(八)</sup>、シャーシュ、フェルガーナ、ブハーラー、ナサフなどの諸國の兵も加わつていたといふ<sup>(九)</sup>。

西曆七三〇(開元一八)年にも突騎施軍はブハーラーの南方まで進出したが、利を失い、退却する途中、可汗(蘇祿)の甥が捕虜となつた。しかし、新手を入れかえてサマルカンドを圍んだ。城將サウラ Sawra b. al-Hurr の急報に接したフラーサーン太守ジュナイド al-Junaid b. Abd al-Rahman は直にアム河を渡つたが、サマルカンド南方のシャウダール山の峽路で突騎施軍に襲われた。このとき、サウラが突騎施軍の後方を衝いたけれども、アラブ軍は一萬二千の兵のうち、僅に一千人を残すのみという大損害をうけた。ジュナイドはこのような犠牲によって辛うじてサマルカンドに入ることが出来た。ダマスクスのカリフ、ヒシャームはバストラやクーファから續々と援軍を送り出し、また武

器や軍費を補給するとともに、ジュナイドに兵士徵募の權をあたえた。ここに至って蘇祿もサマルカンドの占領をあきらめ、ブハーラー方面に軍を轉じ、各地を轉戦したのちに北に歸った。<sup>(10)</sup>

二年たつてジュナイドが死んだが、七三四（開元二二）年二月にはフラーサーンにハーリス・ビン・スライジュ al-Harith b. Sulajj を中心とする大反亂が起り、トカラ（吐火羅）、フツタル（骨咄）、ナサフ（史）等の諸國の王も呼應して立った。この形勢下にサマルカンドをはじめ、ソグディアナ諸國も獨立し、僅にブハーラーやチャガニヤーンなどがアラブ人の支配下に残っただけとなった。

七三六（開元二四）年になると、フラーサーンの太守アサド Asad b. 'Abdallah は本陣をマルウ（メルヴ）からバルフに移し、ハーリスの與黨を討伐するとともに、アム河を渡ってフツタルを攻めた。その王は突騎施に援軍を求めたので、おりからチュ河畔のナワールカス Nawākath にいた蘇祿は、わずか十七日の後、早くもフツタルに姿を現わしたという。

蘇祿來るときいて、急いで退却しようとしていたアサドはアム河の渡頭で突騎施軍に襲われた。河の南岸に渡って陣をかまえたが、またまたそこをも襲われ、算をみだしてバルフ方面に潰走した。勝に乗じた蘇祿可汗はハーリスと結んで、バルフの攻略を志し、廣くソグディアナ、吐火羅方面の兵を招いた。吐火羅葉護をはじめ、シャーシュ、フツタル、ストルーシャナ（ウシュルーサナ）などの諸國もみな出兵して、これに参加した。その年十二月七日、蘇祿は總軍三萬をもってバルフに迫ったので、アサドも全軍をあげて迎え撃とうとした。しかし蘇祿は突然に兵を、西方のジュズジャン（Juzjān, Juzajān）に轉じた。そこはマルウ・アル・ルードからバルフに向う途中にある沃野地帯である。ジュズジャンの王はアラブ人に心を寄せ、これに協力してハリースターン Kharistān 附近の戦で大に侵入軍を破っ



た。風雪を冒しての凄惨な死闘であったが、蘇祿とハーリスとは身をもって戦場を離脱し、アラブ兵の急追をうけながら吹雪のすさぶなかを逃れ去った。<sup>(二二)</sup>この一戦はアラブ人にとってはフラーサーンの運命を賭したものであったが、結局蘇祿にとって殆ど致命的の敗北におわたったのである。

### 三、唐朝と蘇祿

前述の如く、突騎施可汗蘇祿がウマイヤ朝下のアラブ勢力と中央アジアの支配権を争ったのは西暦七二〇年から七三六年（開元八―二四）に至る足かけ一七年間である。この間、その唐朝に對する態度も必しも平和的ではなかった。ただ吐蕃とは大體、親善關係を保った如くであるが詳しい事情はわからない。吐蕃の中央アジアにおける政策は、突厥諸部族や、各地の土着民と結び、唐勢力を排除することにあつたようであるから、蘇祿としても、これを利用しようとしたものである。

唐としては、種々の懐柔策をとつたようである。通鑑（二一二）には開元十年十二月庚子のこととして「十姓可汗阿史那懷道の女をもつて交河公主となし、突騎施可汗蘇祿に嫁せしむ」とある。ただし冊府元龜（九七九）には交河公主を金河公主につくり、岑仲勉はその方が正しいとしている。<sup>(二三)</sup>しかし唐會要、通鑑、杜環經行記、唐書（一六六）杜佑傳その他みな交河につくり、この方が正しいのではないかと思われる。その降嫁の年代を唐會要（卷六）は開元五年十二月のこととしているが、岑氏は通鑑の年代の方が信すべきであると記している。<sup>(二四)</sup>この點については筆者も同意見である。

同じく通鑑開元一四（七二六）年の項には、この歳「杜暹、安西都護となる。突騎施の交河公主、牙官を遣わし、馬千匹をもつて安西に詣り、互市せしむ。使者、公主の教を宣ぶ。暹、怒つて曰く『阿史那の女、何ぞ教を我に宣ぶるを

得んや』と。その使者を杖うち、留めて遣らず。馬は雪を経て盡く。突騎施可汗蘇祿大に怒り、兵を發して四鎮に寇す。たまたま暹、入朝し、趙頤貞代りて安西都護となり、城に嬰りて自ら守る。四鎮の人畜儲積、みな蘇祿の掠むるところとなり、安西僅に存す。すでにして蘇祿、暹の入りて相となりしことを聞き、やや引き退く。尋いで使を遣わして入貢す」とある。杜暹が安西都護になったのは開元十二年三月で（通鑑その年三月の條）、長安に歸つて宰相となつたのは同十四年九月（唐書本紀八）のことであり、舊唐書（九八）杜暹傳によると、開元十三年には干闥王尉遲眺が陰に突厥及び諸蕃國と結んで叛亂を圖つたとき、暹は密にその謀を知り、兵を發し、捕えてこれを斬り、あわせて其黨與五十餘人を誅したとある。ここに突厥とあるのも、恐らく突騎施蘇祿と關係があるのであろう。また開元十四年は蘇祿がフツタルに遠征した年でもあるので、恐らくフツタル遠征の方が先で、次に安西に寇したのであろう。

更に通鑑の開元十五年九月（七二七年一〇—十一月）の條にも「閏月庚子、吐蕃の贊普、突騎施蘇祿と安西城を圍む。安西副都護趙頤貞擊つてこれを破る」とあり、開元二三年（七三五）冬十月の項にも「戊申、突騎施、北庭及び安西撥換域に寇す」とあり、しきりにその侵寇をつたえている。しかも冊府元龜（卷九七五）によると開元二二年六月のこととして「乙卯、突騎施、その大首領何羯達を遣わして來朝せしむ。鎮副を授け、緋袍銀帶及び帛四十疋を賜い、宿衛に留む」とあるから、唐の方ではまだ慰撫策を棄てていないことがわかる。舊唐書本紀（卷八）によると開元二四年正月のこととして「北庭都護蓋嘉運兵を率いて突騎施を擊つて之を破る」とあるが、これは通鑑にも同じ年月のこととして記され、ただ「大に之を破る」としてある。この時期はあたかも蘇祿がサマルカンドの南方で大にアラブ軍を破つたときと、ジュズジャーに遠征して、致命的敗北を喫したときとの中間に當っている。彼はこのとき唐朝の歡心を求めた如くで、元龜（九七五）には開元二四年八月甲寅のこととして「突騎施大首領胡錄達干來りて和を求む。之を許す。内殿に宴し、

右金吾將軍（員外置）を授く。錦衣一を賜い、帛及び綵一百疋を付し、放つて蕃に還らしむ」としてある。蓋嘉運に敗られたが爲なのか、それとも大舉してアラブ軍と戦う準備工作のためか、どちらの動機の方が強かったかはわからぬけれども、東に唐朝を、西にアラブ軍をひかえての、両面作戦では流石の彼も不利を感じたと見えて、唐に對しては和平使を送つたのである。

#### 四、蘇 祿 の 死

上述の如く蘇祿は西はウマイヤ朝のアラブ軍と戦う一方、東は唐朝をもなやました。タバリーによると、アラブ人は彼のことを *Khāqān Abi Muzāhim* と呼んでいたとある。<sup>(一五)</sup> そして「*Abū Muzāhim* というクンヤ（綽名）は彼がアラブ人に *zāhanna* していたからである」と説明しているが、ザーハマは「あらがう」「競う」「楯をつく」というような意味で、アブーは本來は「父」の義だが、「……の主」という様な意味もあつて、綽名の場合にはその用例が多い。アブー・ムザーヒムとは「突つてかかってくる奴」という様な意味であろう。<sup>(一六)</sup> これは彼がいかに剛強漢だつたかを示すものと思われるが、寄る年波には勝てず、やがて没落の運命に見舞われた。唐書（二二五下）突厥傳によると「はじめ蘇祿はその人を愛治し、性勤約であつた。戦う毎に得る所があれば、盡く下のものに與えた。故に諸族は悦んでこれに附し、盡力した。また吐蕃や（東）突厥と交通し、二國ともみな、女をもつてこれに妻あわせた。ついに三國の女をもつてならびに可敦<sup>ハイトゥーン</sup>とし、數子をもつて葉護<sup>ヤブグ</sup>とした。費えは日に廣く、しかも平常の儲えはなかつた。晩年は愁寔<sup>ヤスン</sup>聯せず。そのため齒獲はややとどめて、分たなかつた。下ははじめて貳（ふたごころ）を抱いた。また風（中風）を病み、一支が攣して（通鑑には一手攣縮とある）事につかえなくなつた。ここにおいて大首領莫賀達干、都摩支の二部が盛とな

った。種人の自ら娑葛の後と謂うものは黄姓となし、蘇祿の部を黑姓とし、こもごも相猜讎した。俄にして莫賀達干と都摩支は夜、蘇祿を攻めてこれを殺した」とある。通鑑(卷二二四)開元二六(七二八)年六月の條下にもほぼ同様の記載が見られるが、「都摩支」を實録や舊唐書に従って「都摩度」につくっている。「莫賀達干」は唐會要には「莫賀咄達干」としてある。更に通鑑には「その部落、また分れて黄姓、黑姓となり、互に相乖阻した。ここに於て莫賀達干は兵を勅して夜、蘇祿を襲つてこれを殺した。都摩度ははじめは莫賀達干と謀を連ねたが、既にしてまたこれと異れ、蘇祿の子骨噉を立てて吐火仙可汗となし、もつてその餘衆を收め、莫賀達干と相攻めた。莫賀達干は使を遣わして磧西節度使蓋嘉運に告げた。上は嘉運に命じ、突騎施、拔汗那以西の諸國を招集せしめた。吐火仙は都摩度と碎葉城に據つた。黑姓可汗爾微特勒は恒邏斯城に據り、相與に兵を連ねてもつて唐を拒いだ」とあるが、これによると蘇祿を殺したのは主に莫賀達干であつて、都摩度は事前に通謀したのみであつたと解される。蘇祿の死が正確にいつであつたかわからないけれども、少くも開元二六年(七三八)六月ころ以後には下らぬであろう。ハリースタインの敗戦はギップ氏の研究によれば七三七年十二月であつたといふ<sup>(一七)</sup>。しかしタバリーによればハリースタインの戦も蘇祿の死もともに回曆一九九年(西曆七三七・一・八一七三七・一二・二八。開元二四・一二・三一―二五・一二・二三)のこととしてゐる。それでアラブ史料では蘇祿の死を七三七年とし、唐史料は七三八年とするので、少くも半年ほどの食いちがいが生ずる。シャヴァンヌは、蘇祿の死後、莫賀達干と都摩度等との間に不和が生じ、前者は北庭都護蓋嘉運の援助を求めたが「恐らくこの求援が中國に達したのが七三八年だったので、これが中國の史家が蘇祿可汗の死を、その時期とした理由であろう。しかしこれはタバリーの證言の示すが如く七三七年にもつていかなければならぬものである」と論じてゐる<sup>(一八)</sup>。

私はこのシャヴァンヌの意見を疑わしいと思う。舊唐書突厥傳にも「(開元)二十六年夏、莫賀達干、兵を勅して夜、

蘇勒(祿)を攻めてこれを殺す」とある如く、蘇祿の死の報が中國に達したのが、二六年夏だったのではなく、その變死がその時に起ったのである。いかにも西陲の事變の報が長安まで傳わるには當時は相當の日數を要したではあろうが、大きな事件については必ずその起った時期をかなり正確に報告するに違いないから、報告の達した時をもって、あつさりと事件の起った時として記録するようなことはそう易々とありうるものとは考えられない。この場合はタバリーの方がハリースターの戦と蘇祿の死とをまとめて書いてしまつて、この二つの事件の間に少くも半年の経過のあつたことを明瞭にしなかつたのであろう。前述の如くハリースターの戦は猛烈な吹雪の中で行われたというから大體七三年の冬であつたと考えられるが、そこから故郷にひきあげ、翌年の夏に莫賀達干に殺されたものである。

タバリーによると、敗戦歸國した可汗(蘇祿)は「ある日、クールスール *Kur-sul* と雌雉子を賭けて西洋雙六 (*nard*) をたたかわした。突騎施のクールスール *Kur-sul al-Turgishi* はこの賭勝負に勝つて、雌雉子を要求した。そしていうには『雌ですぞ』。すると(可汗は)曰く『他の、雄のにしておけ』。そこで二人は言い争つたあげく、クールスールは可汗の腕をくじいた。そこで可汗は、よし必ずクールスールの腕を折ってくれると誓つた。このことを聞いたクールスールはひきこもり、大に味方を集め、可汗に夜襲をかけて、これを殺した。朝になるとチュルク人たちは彼(クールスール)から離れ去り、彼をただひとりにしてしまった。するとカシャーンのひとトゥファイルの子ザリーク *Zariq b. Tufail al-Kashani* とハムキーン族の人々 *Ahl bait al-Hamkiin* が彼の所へおし寄せた。これらはチュルク族中の豪族であるが、彼を襲つて幽閉し、彼の如きものに當然なすべきことをして、これを殺した。そこでチュルク族は分裂して、互に相攻め、その一部はシャージュにつくことになつた……」とある。<sup>(一八)</sup>

唐の史料では、蘇祿は晩年に風を病み、一手がしびれて自由にならなくなつたとあるが、アラブ史料では部將クール

スールのため折られたとしている。しかし、晩年に吝嗇になったという唐の記録と、雌雉子をおしんであたえなかったというアラブ史料の記載とでは一脈相通するものがある。唐の記録では、莫賀達干が蘇祿を殺したとし、アラブ史料は Kursul の手にかかったとしている。莫賀達干とクールスールは當然、同一人と考えられるが、これについてはすでに先人の意見が発表されている。最初の人マルクアルトでクールスールとは突厥の官名「闕啜」(闕律啜、屈律啜 Kulcur) にあたり、莫賀達干に外ならぬとしたが、ウェ・バルトリードもこれに賛同した。ジャヴァンヌは中國史料によつて莫賀達干が闕律啜という官名を帯びていたことを證明して見せた。それは次のような論法である。

まず唐書突厥傳によれば蘇祿が殺されたあと、莫賀達干を憎んだ都摩支(支は度にもつくる)は蘇祿の子吐火仙骨啜を立てて可汗とし、これを擁して碎葉城に居り、黑姓可汗爾微特勒を引いて怛邏斯城を保たしめ、共に莫賀達干を撃つたのであるが、これに對し玄宗は「使積西節度使蓋嘉運和撫突騎施・拔汗那西方諸國。莫賀達干與嘉運率石王莫賀咄吐屯・史王斯謹提共擊蘇祿子破之碎葉城云々」とある如く、莫賀達干を助けて蘇祿の子等を討伐せしめたのである。その戦争のあとで、論功行賞として「明年擢闕律啜爲右驍衛大將軍、冊石王爲順義王、加拜史王爲特進顯其功」とある。「右の二つのテキストを合わせることによつて、莫賀達干と闕律啜とが同一人であるということがはっきりする。こうしてアラブ人のいうクールスール(クルチュール)と中國人のいう莫賀達干の比定に對してなしうる最後の反對も斥けられたことになる。そうきまると、もう一步をすすめて、莫賀達干は處木昆部族の闕律啜であつたことを示すことが出来るのである。それはつまり次の如き史料からである」といい、

一、通鑑に開元二十七年(七三九)八月、吐火仙可汗が虜えられたとある。

二、冊府元龜(卷九七七)には、同年九月、處木昆匍延闕律啜部落、拔塞幹部落、鼠尼施部落、阿悉吉部落、弓月

部落、哥係部落、皆遣<sub>レ</sub>使謝<sub>レ</sub>恩、請<sub>ニ</sub>内屬<sub>一</sub>、許<sub>レ</sub>之<sub>云々</sub>とある。

三、同書（卷九七五）には開元二八年三月にかけて「以<sub>ニ</sub>突騎施部落處木昆匍延闕律啜<sub>一</sub>爲<sub>ニ</sub>右驍衛員外大將軍<sub>一</sub>」とある。しかるに「この右驍衛員外大將軍という稱號はまさしくわれわれが莫賀達干に比定したところの闕律啜に與えられたところのものである。故に莫賀達干は確かに處木昆の闕律啜であつたのである。」

ジャヴァンヌの右の如き證明は、よく考えるとあまり確實なものでなく、はっきりと莫賀達干が闕律啜という官名でもよばれたということを示してはいない。かつ闕律啜が果して官名であるかどうかにもやや疑問がある。<sup>(二四)</sup>それにもかかわらず莫賀達干と *Kürsai* とはやはり同一人物と見るのが妥當な考ではあろう。

この莫賀達干に關する東西の史料はよほど混亂していて、通鑑（卷二二五）によれば天寶三載（七四四）河西節度使夫蒙靈訢討<sub>ニ</sub>突騎施莫賀達干<sub>一</sub>斬<sub>レ</sub>之。

とあつて、唐將のため斬られたとあるが、タバリーによればクルスールは回曆一二一年（七三八年一二・一八一七三九年一二・六。開元二六年十一・三一同二七年十一・二）にフラーサーン太守ナルス・ビン・サイヤール *Nasr b. Sayyār* に磔殺されたとしてある。<sup>(二五)</sup>この兩記錄の差を如何に解釋すべきかについては後節で卑見をのべたいと思う。

## 五、黃 姓 と 黑 姓

突騎施の衰亡の重大原因の一つは、黃姓と黑姓の二派に分裂して相爭うようになったことであるが、黑姓突騎施は *Koscho-Tsaidam* 碑文に現われる *Kara-Turgāsh* であることは<sup>(二六)</sup>ジャヴァンヌも指摘している。唐書突厥傳には蘇祿の晩年に、身體が不自由となつたとき「是において大首領莫賀達干と都摩支（度）との二部がまさに盛となり、種人

の自ら娑葛の後と謂う者は黃姓となり、蘇祿の部は黑姓となり、こもごも相猜讎した云々」とあるが、黃黑の別は蘇祿の晩年に始まったものでなく、もっと前からあったのだと思う。ただ蘇祿の氣力が衰え、統制が十分でなくなると、この二派の對立がめだつてきたのであろう。莫賀達干と都摩度ははじめはどちらも反蘇祿派だったのであるが、前者が蘇祿を倒すや、たちまち敵手となつてしまつた。そして舊唐書突厥傳にある如く「都摩度は初め莫賀達干と連謀したが、俄にしてまた相背き、蘇祿の子吐火仙を立てて可汗とし、もつてその餘衆を輯め、莫賀達干と自ら相攻撃した」のである。シャヴァンヌは莫賀達干は黃姓に屬した人だと云っているが、おそらく當つていゝであらう。ただし都摩度の方はどちら側の人だつたかはつきりしない。が、勢の趨くところ黑姓側についたことは明かである。

蘇祿の子吐火仙が都摩度らに擁されて可汗となつた。これはいうまでもなく黑姓であるが、この外にもう一人、黑姓可汗爾微特勒という者が現われている。吐火仙は碎葉城に、爾微の方は恒羅斯城に據り、相呼應して莫賀達干と對抗したことは前文に述べた如くで、つまり黑姓側からは二人の可汗が立つたのである。そこで莫賀達干の方は安西都護蓋嘉運に通じ（舊唐書突厥傳）、唐朝も、黃姓側を助け、黑姓の討伐に乗り出した。唐書突厥傳によると「莫賀達干は（蓋）嘉運とともに石王莫賀咄吐屯、史王斯謹提を率い、共に蘇祿の子を撃ちてこれを碎葉城に破る。吐火仙、旗を棄てて走る。これを禽（擒）し、その弟葉護頓阿波を并せ（捕う）。疏勒鎮守使夫蒙靈贊、銳兵をさし挟み、拔汗那王とともに恒羅斯城を掩い（不意に襲う）、黑姓可汗とその弟撥斯とを斬り、曳建城に入りて交河公主および蘇祿の可敦、爾微の可敦を收めて還る」とある。この戦争にフェルガーナやシャーシュ、及びナサフ王イシュカンド、などが唐軍と莫賀達干を助けたことは注目すべきで、通鑑はこれを開元二十七年八月（七三九年九月）のこととしている。蘇祿の死後、いくばくもない時のことだつたのであらう。なお、このとき捕えられた吐火仙可汗は長安に護送された後に赦されて左金



吾員外大將軍に任ぜられ、循義王に封ぜられ、その弟頓阿波（または頡阿波）は右武衛員外大將軍に任ぜられた（全唐文卷二四。玄宗授吐火仙可汗等官爵制）。また蘇祿の妻となった交河公主（一説に金河公主）も無事に中國に歸つたのであるが、その娘が豆盧榮という人の妻となり、公主もそのもとに身を寄せ、温州や栢州など婿の任地を轉々して數奇な運命にあつたことが太平廣記（二八〇）所引の廣異記にあると岑仲勉氏が述べている。<sup>(二八)</sup>

こうして蘇祿が強盛となって以來、二十餘年をへて、唐朝の勢威はまた天山のかなた、西突厥の本據地まで及ぶこととなつた。通鑑（二二四）開元二十八年三月の條に「（蓋）嘉運請立阿史那懷道之子昕爲十姓可汗、從之」とある。唐朝は、突騎施部族の西突厥十姓の支配には、この機會をもつて、終止符をうち、またもや阿史那家のものを傀儡的の可汗に立てるといふ政策に出たのである。これでは當然、突騎施部族の不滿を爆發させるに至ると思われるが、果せるかな通鑑の同年十一月の條に「突騎施の莫賀達干は、阿史那昕が可汗となると聞いて、怒つて曰く『はじめ蘇祿を誅したのは我の謀である。いま史昕を立つ。何を以つて我を賞せんとするか』と。ついに諸部を帥いて叛した。上、すなわち莫賀達干を立てて可汗とし、突騎施の衆を統べしめることとし、蓋嘉運に命じてこれを招諭せしめた。十二月乙卯に莫賀達干は降つた」とある。通鑑考異には、莫賀達干は唐朝の處置を不滿として叛いたので明皇（玄宗）は「莫賀達干を以つて小可汗となし、ただ突騎施の衆をのみ統べしめることとし、嘉運をして之を招諭せしめた。故に來り降つた。然して昕は十姓可汗となり、諸部を兼統すべきである。故に明皇は兵を遣りて之を送らしめた。しかし莫賀達干の殺す所となつた云々」としてある。別に冊府元龜（九七七）には開元二十八年十一月のこととして「突騎施可汗莫賀達干、その妻子及び羸官首領百餘人を率いて内屬す。はじめ莫賀達干、烏蘇萬洛とともに諸蕃を扇誘して背叛す。帝、蓋嘉運に命じて恩を宣べて詔諭せしむ。皆、相率いて降る」としてある。

冊府元龜（卷九六四）に開元二六年十月にかけて「詔す。康國王烏勒卒す。その子咄喝を封じて嗣となす。謝颺國王誓颺卒す。その子如沒拂達を封じて嗣となす。曹國王沒羨卒す。その弟蘇都僕羅を封じて嗣となす。史國王延屯死す。その子忽鉢を封じて嗣となす。みな死は他年にあり。いま從つて赴くなり」とあるが、康（Samarqand）謝颺（Zabulistan）曹（Ishūkhan または Sutrūshanah）などの諸國の王はすでに何年か前に代つていたのであるが、いままとめて封冊をうけたというのは、蘇祿の死とともに唐の威令がまたソグディアナやアフガニスタン方面にまで及ぶこととなつた證據と見てよいであろう。もう一つの理由はアラブ族も丁度そのころ蘇祿のためフラースーン方面に壓迫されたまま、まだアム河以北を回復するに至っていなかったがためであろう。しかしこのような唐勢力の伸張もほんのつかの間のこと、アラブ族は短時日の間にソグディアナ地方に歸つてくるのである。

## 六、唐の對突騎施政策の一轉

ハリースターンの一戰で、蘇祿可汗に殆ど致命的打撃をあたえたフラースーンの太守アサドも可汗と同じ年に死に、練達の老將ナスル・ビン・サイヤールがカリフ、ヒシャームによりその後任に選ばれた。ナスルが自ら兵を率いてサルカンドに入り、鎮兵を置き、更にシャージュまで進んだのが七三九年（開元二七）のことであるといえ、<sup>(二九)</sup>いかに回復の事業が迅速であつたかが想像されるであろう。

中央アジアの支配問題をめぐり唐朝とカリフ政權とはこれまでいく度か衝突の危機にのぞんだ如くであるが、幸にして回避されてきた。しかし、結局勢の赴くところカタストロフに追ひこまれてしまうのであるが、それはこのような情勢下においてであつた。

兩者の正面衝突こそ本稿の主題たるタラス（アラビア人のタラーズ）の大戦である。その直接の原因は北インドのギルギット（勃律）方面への遠征で偉功をたてた高麗出身の名將高仙芝の石國討伐である。この討伐は中國史料によると、突如として起った如き印象をあたえ、何故に行われたかという詳しい事情は記してない。簡単に「蕃臣の禮を缺いたから」としてある。石國（シャーシユ、今のタシケントの地）は蘇祿死後の西突厥の混亂には、前述の如く唐に協力したし、それ以前も唐朝に忠誠を示してきた國である。蘇祿死後の亂に唐に協力したため、開元二八年三月に唐はその王莫賀咄吐屯を石國王に封じ、特進を加え、旌節を賜い、更に冊して順義王にしたとあって、冊府元龜（九六四）にはその冊文が収めてある。「爾石國王莫賀咄吐屯……盛忠化に向い、蕃陲を扞ぐをなす。このごろ蘇祿の殘妖なお邊患をなす。すなわちよくその隣國を納め、授くるに良圖を以てし、かの疆場（國境）を候い、相に表裏をなす。……是をもつて爾を冊して順義王となす。爾よろしく王猶を敬慎し、部衆を撫寧し、永く藩輔を保つべし。慎まざるべけんや」としている。蘇祿の餘黨が邊患をなしたとき、よくその隣國を納めて、授くるに良圖をもつてし、また國境をうかがって、唐朝と呼應したというのである。タバリーによると「アサドが太守だつたとき、可汗（蘇祿）が殺され、トルコ族は分裂し互に他を攻伐した。そこでソグドの衆は歸國をのぞみ、そのうちの相當數はシャーシユ（石國）に心を寄せた」とある。

ソグドの衆 (ahi al-Sughd) とは同じくタバリーによると、クタイバ・ビン・ムスリムの死後、ソグディアナの民衆はアラブ人の支配から脱しようとしたが、彈壓をうけたので、大舉してフェルガーナその他に移動し、流亡の民となつた。やがて、多數が突騎施可汗のもとに走って、特殊な軍隊に編成され、これに更に續々と新手の軍が加わり、可汗がアラブ軍と戦うときには大に奮闘したものだとしてある。唐書突厥傳によると、蘇祿の死後・蓋嘉運等がその地を平

定した時「又料<sup>オサ</sup>西國散亡數萬人<sup>ニ</sup>以與<sup>ニ</sup>拔汗那王<sup>ニ</sup>」とあり、同じ事實を通鑑(二一七)開元二七年の條には「悉收<sup>ニ</sup>散髮之民數萬<sup>ニ</sup>以與<sup>ニ</sup>拔汗那王<sup>ニ</sup>」としている。「散髮」は或は「散亡」の誤かともとれるが、突騎施は辮髮の民であつた<sup>(三三)</sup>に對し、隋書西域傳康國の條にはその風俗をのべ「丈夫翦髮」としてある。これを通鑑が散髮とよんだものとも思われる。史國王斯謹提 al-Ishkand は、このような流亡軍の指揮者だつたらうといわれるのであるが、唐朝ではこれらあげてフェルガーナ王に與えたというのである。しかしこの通りには實行されなかつたと見える。タバリーによれば、これらソグドの衆のうちにはシャーシユに心を寄せたものが多く、ナスル・ビン・サイヤールが七四一年にかの地に至つたとき、和義をむすび、それぞれ故郷に歸つたとある<sup>(三三)</sup>のでも察せられよう。

唐書西域傳石國の條によれば、天寶元(七四二)年には、先代の莫賀咄吐屯のあとをうけたその子那俱車鼻施が玄宗から懷化王に封ぜられ、鐵券を賜うたとある。この頃までは唐と石國との關係は圓滿であつたが、まもなく悪化して、「蕃臣の禮なし」ということになるのである。その裏面の事情は何であつたか、以下にこれを考えて見たい。

前述の如く、蘇祿の死後、種々の曲折をへてのち、唐は莫賀達干の可汗たることを認めはしたが、やはり阿史那昕を十姓可汗として西突厥の民を率いさせようとする最初の考を棄てなかつた。しかし、昕がしてその地に赴けば、當然、莫賀達干の反撃をうけるにちがいない。よつて武力をもつて昕を護り、強硬に送りこむ策をとつた。唐會要の逸文に<sup>(三四)</sup>

開元二十九年、解瑟羅之孫、懷道之子昕爲<sup>ニ</sup>可汗。遣<sup>レ</sup>兵送<sup>レ</sup>之。

とあり、通鑑(二一五)天寶元年四月の條には

「上、兵を發し、十姓可汗阿史那昕を突騎施に納れんとす。俱蘭城に至り、莫賀達干の殺す所となる」とある。果して結果は悲劇に終つたのである。俱蘭城は唐書(四三下)地理志によればタラス城の東方六十里にあるとあり、唐會

要佚文によれば「碎葉西南俱蘭城」とあり、アラブ地理書（イブン・ハウカル、ムカッダシー、アブル・フィダー等）には *Kulān* とし、*Tarāz* の東にある城壁をめぐらした大きな村落で、その地方で重要な聚落の一であるとして(三五)いる。いずれにせよ、莫賀達干はここに到って、公然と唐朝に反抗し、その敵となってしまった。唐書突厥傳にやはり天寶元年のこととして

「突騎施部、更に黑姓伊里底密施骨咄祿毗伽をもつて可汗となす」とある。黑姓突騎施は、これまでは唐朝から彈壓されてきたのであるが、黃姓を代表していたと思われる莫賀達干が唐に反抗することになったので、これに對抗して黒姓側からも別の可汗を立てたのであろう。唐朝では黃黑二姓突騎施の争いに對し、どちらにも屬さぬ阿史那の一族を十姓可汗として送りこもうとして失敗したので、今度は反抗する黃姓突騎施を押し、黒姓突騎施を支持する政策に轉じた如くである。この際、可汗たることを認められた伊里底密施骨咄祿毗伽は、實は蘇祿の没落のときから史上に現われてきた豪族都摩度（または支）その人ではないかと私は考えている。その根據は、通鑑（二一五）天寶元年四月の條に、阿史那昕が俱蘭城で莫賀達干に殺されたことをのべた後につづけて

「突騎施大纛官都摩度來降す。六月乙未、都摩度を冊して三姓葉護となす」としている。冊府元龜（卷九六五）には、その時の冊文がのっていて「咨、爾骨咄祿毗伽都磨度闕頡斤よ」と呼びかけている。同書（卷九七五）天寶元年六月の項に見えるこれと同一人が玄宗から圓書鐵券を賜うたときの冊文にも同様の呼びかけが行われている。同じく元龜（卷九七二）の天寶二年の條にも「二月、安西黑姓可汗骨咄祿毗伽遣使獻方物」とあるし、同書（卷九六五）の天寶三載六月十二日の詔は「突騎施伊里底密施骨咄祿毗伽」を十姓可汗に命じたものである。（*Itämish*）*Kutluq Bilgä* という稱號を都摩度が用いたことは、右の如き例證によって明かであるから、天寶元年に黒姓部から出て可汗となったの

は、この人に外ならぬと思われる。この際は唐書の文面でもわかる如く可汗となったのは黒姓突騎施部から推されたのであり、唐が正式に認めたからではなかった。そこで唐はその年は「三姓葉護」という稱號を公認し、天寶三載に至って始めて「十姓可汗」に昇格させたのである。その原因はこの年に反対派の莫賀達干が殺されたからとも思われる。通鑑（二一五）天寶三載五月の條に「河西節度使夫蒙靈管、突騎施莫賀達干を討ちこれを斬る。更に黒姓伊里底蜜施骨咄祿毗伽を立てんと請う。六月甲辰、骨咄祿毗伽を冊拜して十姓可汗となす」とあるのは、この間の事情を説明するものである。もちろん、莫賀達干を攻殺するについては、唐軍はこの黒姓側の可汗とその兵力を利用したものである。右の如く都摩度が十姓可汗骨咄祿毗伽に外ならぬとしても、その位にあったのは天寶八載（七四九）頃までであつたらしい。元龜（卷九六五）には天寶八載七月のこととして「十姓突騎施移撥を冊して可汗となす」とし、その次に冊文をのせている。ここに可汗の交代があつたことが明かである。

黃黑二姓の争いはその後も續いたと見えて、唐書突厥傳には「(天寶)十二載、黒姓部登里伊羅蜜施を立てて可汗となし、また詔冊を賜う。至德(七五六―七五九)後、突騎施衰う。黃黒姓みな可汗を立てて相攻む。中國まさに故多く、治するに暇あらざるなり」とある。天寶十二載に可汗となつた黒姓可汗登里伊羅蜜施にあたえた冊文は全唐文卷三九に收めてあるが「卿敬勉良圖、光昭盛典、保我疆場、惡我寇讎」というような文句もあつて、唐朝に忠誠であつたことが知られ、同じく全唐文(三九)にある玄宗が黒姓可汗に鐵券をあたえるの文中にも「卿雖有沙漠、常扞烟塵、識進退存亡之端、知古今成敗之數、久率蕃部、歸化朝廷、兼拒兇○、挫其侵軼」というような褒め言葉がある。(三六)

天寶十載、タラスの會戰に参加し、不幸にも捕虜となつてイラーク地方までつれて行かれた杜環は、その「經行記」中で次のように述べている。

「勃達嶺 (Badai pass) から北行すること千餘里、碎葉川 (Suyāb) に至った。(中畧) また碎葉城がある。天寶七載、北庭節度使王正見が薄<sup>セ</sup>り伐ったところ。城壁は摧毀し、邑居は零落していた。昔、交河公主が居止された處で、大雲寺を建てられたが、猶存している。その川の西は石國に接している。長さ約千餘里、川中に異姓部落があり、異姓突厥があつて、おのおの兵馬數萬を有している。城堡間雜し、日に干戈を尋<sup>モテ</sup>いでいる。凡そこここの農人はみな甲冑を擐し、専ら相虜掠し、もつて奴婢とするのである。その川の西頭に城があつて、名づけて恒羅斯<sup>ハラス</sup>という。石國の人が鎮している。(別本に石國の大鎮である)」

異姓突厥があつて、彼我の城堡が入りまじり、毎日干戈をとつて戦つていふのは黃黑二姓の争鬪による混亂状態を示すものであろう。注意すべきは、碎葉のすぐ西までが石國領で、タラス城は石國人が守つていふという記述である。前述の如く開元二八年三月に玄宗が石國王にあたえた書中にも「頃以<sup>コノ</sup>蘇祿殘妖尙爲<sup>ロ</sup>邊患、乃能納<sup>ニ</sup>其隣國<sup>一</sup>授以<sup>ニ</sup>良圖<sup>一</sup>、候<sup>ニ</sup>彼疆場<sup>一</sup>相爲<sup>ニ</sup>表裏<sup>一</sup>云々」とあるごとく、石國王は突騎施部の内亂に乗じ、タラスから更にその東方、碎葉川のほとりまで勢力を延したのである。天寶七載には北庭節度使王正見が碎葉城を攻撃したというが、これも恐らく突騎施の内亂に干渉したためで、黑姓部を助けて、黃姓側を伐つたものではないかと想像される。

通鑑(二一四)によると、開元二九年十月壬寅に北庭と安西を分けて二節度使としたとある。また天寶七載七月から高仙芝が夫蒙靈管に代つて安西都護となつたが(唐書高仙芝傳)、天寶十載にタラスの敗戦の責任者たる仙芝がその任を去ると、かわつてこの王正見が安西都護に任ぜられている(舊唐書卷一〇四封常清傳)。

## 七、莫賀達干の運命

石國が突騎施部の争亂に干渉していたことは明かであるが、黄黑二姓のうちのどちらに味方したのであろうか。蘇祿の死後、唐が黑姓の吐火仙等を討伐したときは、石國は史國、拔汗那などとともに唐軍に協力したことは前述の如くであるから、たしかに黄姓突騎施を支援したのである。

タバリーによれば回歴一二一年（七三八、一二一七三九、一二一七三九、一二一七三九）にフラサーンの新太守ナスル・ビン・サイヤールはシャージュ（石國）を討伐したが、その際、ハーカーン（蘇祿）を殺したクールスールが石國の援助のためにやってきた。ムスリム軍はこれを捕え、ナスルの面前につれてきた。するとクールスールは、ナスルにむかい、トルコ種の駱駝を千頭 *alf ba'ir min yidil al-turk*（双峰駝のことか）と駄馬千頭とを贈ろうと申し出た。ナスルが「汝の齡は」ときくと「知らぬ」と答えたが、「何回出征したか」ときかされると「七十二回」と答えたという。ナスルはついにこれを殺し、（スィル）河畔で十字架につけてさらしたとある。<sup>(三七)</sup> はっきりとナスルの面前で自ら「主人を殺した」と云ったともあるので、これが莫智達干に比定されているクールスールであることは疑うべくもない。ところが莫賀達干の方は前述の如く、唐書その他、中國側史料によれば、それから五年後に安西都護夫蒙靈嘗に斬られたとあるので、スィル河畔でナスルのため磔殺されたというのでは話が變になつてしまふ。ギップ氏は、タバリーの所傳を疑い、アル・アフラム *al-Akhrām* という突厥の一將を捕えた事實が傳説的に發展してクールスールに附會されたのであろうという説を出している。<sup>(三九)</sup> 私はクールスールが捕虜になつた話は、タバリーの敘述に精彩がある點などから推して、やはり事實ではないかと考える。ただ殺されたことは信じられず、やはり駱駝・駄馬などを身の代に出して釋放されたのではないかと疑っている。

この問題はおいて、クールスール（莫賀達干）が石國の援助に出兵した事實から見ても、黄姓突騎施と石國とが親密



な關係にあったことを知り得るであろう。當然のこととして、黒姓突騎施とは不和であつたらうから、初期の如く、唐朝が黃姓を支持していた間はよかつた。しかし莫賀達千の反逆から黃姓突騎施が唐の敵となり、唐が政策を一變して黒姓を支持することになると、石國もまた唐朝に楯をつく立場にならざるを得ないのである。

高仙芝の率いた唐軍が天山を越え石國にまで攻め入った根本原因はここに求むべきものと私は考えている。石國を懲さなければ、西突厥の統治が出来難かつたため、唐書西域傳石國の條に「高仙芝はその(石國王の)蕃臣の禮なきを効して之を討たんことを請う」とあるのもつまり、唐の西突厥統治策を妨害したことを意味するものに違いない。こうして見ると、岑仲勉氏の次のような意見には同意することが出来なくなる。岑氏は曰く

「新唐書二二一下、石國傳にはただ謂う『安西節度使高仙芝、その藩臣の禮なきを効してこれを討たんことを請う』と。今試みに之を推すに、當日屈底波(Qutayba)の前鋒、すでに北して石國に達す。意うに石國大食に貳す。仙芝、大食の東侵に抵抗を爲さんとす。故に此の請あり(四〇)云々。」

ここにクタイバとあるは、もちろんクタイバ・ビン・ムスリム(畏密屈底波)とは別人であるが、アラブの勢力がそのころ石國まで及びはじめていたことは事實である。しかし、石國を討ちこらすことによつてアラブの東進を拒み得ると思われない。またアラブ人が長驅して安西に攻め入るといふような形勢も見えない。もし、そのような原因からであつたなら、クタイバ・ビン・ムスリムの活躍時代に早くも唐軍との衝突が起つていたであらう。

通鑑(二一六)には天寶九載十二月にかけて「安西四鎮節度使高仙芝、僞りて石國と和を約し、兵を引いてこれを襲い、その王および部衆を虜にしてもつて歸る。悉くその老弱を殺す。仙芝性貪にして、掠めて瑟瑟十餘斛、黃金五六橐駝を得たり。其餘の口馬雜貨これに稱ツリう。みなその家に入る」とあるし、舊唐書(一〇九)李嗣業傳には「はじめ仙芝、

石國を招き、約して和好をなし、乃ち兵を將ヒキいて襲いこれを破る。その老弱を殺し、その丁壯を虜にし、金寶・瑟瑟・駝馬等を取る。國人號哭す。因つて石國王を掠し、東のかた之を闕に獻四二ず」とあつて、まことに苛酷な態度であつた。通鑑(二一六)によれば天寶十載正月の條に「安西節度使高仙芝入朝し、擒うる所の突騎施可汗、吐蕃酋長、石國王、竭師王を獻四二ず」とある。竭師は北インド山中のチトラルと考へられているが、これは天寶九載二月に高仙芝が遠征し、その王とともに、そこに駐屯していた吐蕃の酋長をも捕えたのである。石國王の外に、突騎施可汗をも捕えているが、これはいうまでもなく、唐の味方たる黒姓突騎施の可汗ではなくて、その敵方の黃姓突騎施が立てた可汗にちがいない。舊唐書李嗣業傳にも「また(高仙芝に)従つて石國を平げ、及び九國の胡、ならびに背叛突騎施を破る」とある如く、背叛の突騎施やソグディアナ地方の九國の胡人(恐らくは流亡のソグド人)が石國に味方したものでらしい。

單に高仙芝のこのやり方が苛酷だったのみでなく、唐朝も捕虜として長安に護送されてきた石國王に前例に乏しいほどの嚴罰を加えた。唐書西域傳石國の條には「(石國)王、降を約す。仙芝、使者を遣わして護送し、開遠門に至る。俘としてもつて獻ず。闕下に斬る。ここにおいて西域みな怨む云々」とある。背叛の君長にして捕えられて長安に送られたものは、大むね大赦されるのが慣例だったようであるが、今回の處置を見ると、唐側の石國王に對する憎しみの激しさに驚かれる。

果してその反動も激しかった。通鑑(二一六)天寶十載四月の條には

「高仙芝の石國王を虜とするや、子逃れて諸胡に詣り、具ツツサに仙芝の欺誘貪暴の狀を告ぐ。諸胡みな怒り、潛に大食を引いて共に四鎮を攻めんと欲す。仙芝これを聞き、蕃漢三萬の衆を將いて大食を撃つ。深く入ること七百餘里、怛邏斯城に至る云々」とある。諸胡とはいうまでもなくソグディアナの諸國人のことであろう。これらの國はアラブ軍の侵入

の際は、しきりに唐朝の援助を求めたのであるが、今や、逆にアラブ軍を引いて唐朝に復仇しようとしたのである。

## 八、唐軍の潰滅

そのころイスラム世界においても大政變がおこり、ウマイヤ朝の命脈も旦夕にせまっていた。天寶五載から八載にかけて(七四六―七四九)、イラン系のアブー・ムスリムがフラーサーンで起した反亂が擴大し、アッバース朝がウマイヤ朝にとって替ることになった。兩唐書大食傳その他にいう黑衣大食である。新王朝になってもアブー・ムスリムは東方の重鎮として、マルウを本據に睨みをきかせていた。マーワラーン・ナフルつまりアム河以北、シャールジュに至る地方もまたその勢力下に入ることになったが、この際の混亂に乗じ、ブハーラーにはカリフ、アリーの子孫を奉ずる黨派(シーア)の反亂が起った。アブー・ムスリムの宿將ズィアード・ビン・サーリフ *Ziād b. Šālih* は、ブハーラーを平定し、別將アブー・ダーウードはフツタル *Khuttai* (骨咄) 國を攻めたので、その王はフェルガーナに走り、更に遠くスィーン(シナ)の皇帝のもとに逃れたとアラブ史家は記している。<sup>(四三)</sup> またアラブ史家はフツタルの王の名をハナシ *al-Hanash* またはシブルの子ハービーシュ *Hābish b. al-Shibi* とし、ダーウードの侵入を回曆一三三年(天寶九載七月―十載七月)の出來事としている。<sup>(四四)</sup> 冊府元龜(卷九六五)には「天寶十一載正月壬寅に骨咄國王羅全(唐書には金につくる)節を冊して葉護となす」とあり、その冊文を附しているが、その中に「ああ爾、骨咄國王羅全節、夙に聲教に遵い、志は忠節を尙び、邊疆を捍ぐをなし、勤効ここに著わる。このごろ、群醜撥動し、方に脅從せしめんと欲す。しかも忠懇<sup>カフ</sup>渝<sup>カフ</sup>らず云々」という文言があるが、もちろんアラブ軍の侵入のことを指しているであろう。注意をひかれるのは石國の如く、またこれに同情した諸國の如く、アラブ軍をひいて唐に反抗しようとするものが多かった際

に、フツタルの如く、なおアラブの支配を肯ぜず、唐に訴え出たらしい國もあったことである。

イブヌル・アシル Ibn al-Athir の年代記によると、同じく回曆一三三年中の出來事として

「この年フェルガーナの(王)イフシード Ikshid とシャーシュ(石)國の王とが不和になった。イフシードはス  
イーン(シナ)の皇帝マリックに援助を求めた。そこで(皇帝は)十萬の軍隊をもってこれを助け、シャーシュ王を圍んだ。  
(シャーシュ王は)シナ皇帝の支配下に降り、決して皇帝やその臣たちを不快がらせることをして反抗することはな  
った。このことを聞いたアブー・ムスリムは彼等(シナ皇帝とその臣たち)を討つためズィアード・ビン・サーリフを  
派遣した。それらはタラーズ河畔に至った。ムスリム軍は敵を打破り、そのうち約五萬人程を殺し、二萬人ほどを捕え  
たので、殘兵はシナへと逃れた。この出來ごととは回曆一三三年、ゾール・ヒツジャの月のこと(七五一年六月三〇日—  
七月二九日、天寶十載六月三日—七月三日)であった」とある。<sup>(四五)</sup>つまりフェルガーナ王と石國王とが不和となり、前者  
が唐に援を求めたために、唐軍が石國を討つたのだとしているのである。

フェルガーナと唐との親善關係は序章で述べた如くであるし、天寶八載八月にも甯遠國(フェルガーナ)の王子屋磨  
が來朝し(元龜卷九七一)、同年十一月にはその王たる奉化王阿悉爛達干 Arslan Targan が使を遣わして賀正すとあり  
<sup>同書</sup>(同書同卷)、天寶十載二月にも同じ王が使を遣わし馬二十二頭、豹と天狗各一匹を獻じたともある(同書)。後述する  
如くタラスの合戦にもフェルガーナ軍は唐軍を助けているから、おそらく唐と反對の立場にいた石國王と不和だったと  
思われる。しかし、そのことだけが、唐軍が石國を討つ直接の原因だと見ることは困難で、やはり前述の如く、突騎施  
の内亂により石國が唐朝の怒りをかうような行動をしたためと考えられる。

それにしても、アラブ史家中、當時の中央アジアの動靜を最も詳細に傳えているタバリーが、タラスの大戦について

全く沈黙していることは不思議である。或は現在のテキストにはなくても、原著にはその記録があったのではないかなども思われるが、斷言の限りではない。

この戦に關してした最も古いアラビア語史料はイブン・タイフル *Abū al-Faḍl Aḥmad b. Abī Tahir Ta'fir* (八一九—八六四) の「バグダード年代記」 *Ta'rikh Baghdād* である。カイロの版本があるので容易に見得るものだが、著者イブン・タイフルはバグダードで生れ、そこで歿したが、その家はイラン系で、フラサーンの名門だったとい<sup>(四六)</sup>い、同じくフラサーンと縁の深いカリフ・マアムーンのことを中心としてその著をつくったのである。

アル・マアムーンは自分の異母弟で、前のカリフたるアル・アミーンを滅ぼし(八一三年九月)てからも、マルウにとどまること六年間に及び、八一九年にはじめてバグダード入りをした。その際のことをイブン・タイフルは詳しくしるし、入城の際、アル・ファズル *al-Faḍl b. al-Rabi'* という者が、まだ誰も見たこともないほど見事なルビーの指環石を献じた。マアムーンはそれを人々の手から手にまわして見せて「これよりも美しい寶石を見たことがない」と感歎した。アル・ファズルの曰く「この寶石はかってアル・マフディーがもっていて、その手から(その子)アル・ラシードに贈られたときいたことがあります。」また曰く「アブー・ムスリムがズィアード・ビン・サーリフをシナに派遣したおり、ズィアードからアブー・ムスリムにこの寶石をとどけてよこした。それがアブール・アッバースの手に入り、アブール・アッバースはアブドッラー・ビン・アリーに贈り、イブン・アリーはアル・マフディーに贈<sup>(四七)</sup>ったのであります<sup>云々</sup>」。

右の如くで、僅にズィアード・ビン・サーリフがシナに遠征し、稀代の寶石を手に入れてアブー・ムスリムに贈ったということしかわからない。

いずれにせよ、アブー・ムスリムはソグディアナ諸國の訴えをうけると、ズィアードを石國方面へ派遣したのである。通鑑（二一六）天寶十載（七五一）四—七月の條下に「……諸胡みな怒り、潜に大食を引いて、共に四鎮を攻めんと欲す。仙芝これを聞いて蕃漢三萬の衆を將い、大食を撃つ。深く入ること七百餘里、怛羅斯城に至り、大食と遇う。相持すること五日、カルムック遺羅祿の部衆叛し、大食と唐軍を夾み攻む。仙芝大敗し、士卒死亡ほぼ盡く。餘す所はわずかに數千人なり。右威衛將軍李嗣業、仙芝に勸めて宵に遁ぐ。道路阻隘、拔汗那の部衆前に在りて人畜路を塞ぐ。嗣業前驅し、大槓を奮フルつてこれを撃てば、人馬ともに斃る。仙芝すなわち過ぐることを得たり。將士相失う。別將汧陽の段秀實、嗣業の聲を聞き、ソシ詬りて曰く『敵を避けて先ず奔るは勇なきなり。己れを全うして衆を棄つるは仁ならざるなり。幸にして達するを得るとも、獨り愧なきか』と。嗣業その手を執りてこれに謝し、留りて追兵を拒む。散卒を收めて、俱に免ることを得たり。還りて安西に至り、仙芝に言う。秀實をもって都知兵馬使を兼ねしめ、己れの判官となす」とある。この條の考異中に、馬宇の段秀實別傳という書を引き、それには高仙芝が率いたのは「蕃漢六萬衆」とあるが、唐曆には三萬とあるから、この方に従うと斷っている。また舊唐書李嗣業傳にはこの時の唐軍を二萬としている。前述の如くイブヌル・アシールはシナの兵五萬を殺し、二萬を捕えたといっている。當時の記録に安西の兵二萬四千とあるが、それをすぐって動員することはやや困難であつたらう。しかしフェルガーナとか、黑姓突騎施とか、加勢の蕃軍も相當の數に上つたことと思われるから、大體蕃漢四五萬位が妥當な數ではあるまいか。

タラス河に近いタラス城附近で決戦が行われたことは疑ないが、唐書石國傳には

「(石國)王子、大食に走って兵を乞い、怛羅斯城を攻めて仙芝の軍を敗る」とあり、同書(卷一三五)高仙芝傳にも「仙芝を怛羅斯に攻む」とある。この場合の怛羅斯は怛羅斯城の義であらうし、いうまでもなく城とは城壁をめぐらし

たタラスという町のことである。あたかも唐軍がまずタラス城に入り、これをアラブ軍が攻めた如く受取れる。しかし唐書(七八)段秀實傳には「仙芝、大食を討ち怛邏斯城を圍む。たまたま虜の救至り、仙芝の兵卻ぞく云々」とあり、舊唐書段秀實傳も同様である。これでは、唐軍がタラス城を圍んでいる所へ、アラブ軍が殺到したので、唐軍は一まず退き、陣をたてなおしてアラブ軍と決戦したものらしい。

ギッブ氏は如何なる史料によつたものか知らぬが、(或は Narshakhi かも知れない)戦場はタラーズの近くのアスラハ Athlakh であつたといつている。<sup>(四七)</sup>恐らくは、唐軍がまずタラス城を圍み、アラブ軍の來たのを見てしりぞいて廣野で決戦したというのが真相に近いであろう。その一證は、この戦に参加した杜環が前述の如く、タラス城には「石國人鎮す」と記している事である。これが事實とすれば石國人は、その前年に高仙芝軍のために手痛くたたかれたにも関わらず、なおタラス城を保持していたものと見える。

こうして彼我數萬(或は十數萬)の大軍は通鑑によれば、相對持すること五日間であつたが、葛邏祿 Qarluq の部衆が唐軍に叛き、アラブ軍と呼應して唐軍を夾みうちにしたので、流石の高仙芝も如何ともすることが出來ず、全軍潰滅の悲運におちいたのである。カルルックは葛邏祿、歌邏祿などと書かれ、唐書(二一七下)のその傳によれば三部族よりなり、東西兩突厥の間、つまりバルカシ湖の東南、イリ河の東方に遊牧の生活をしていた勇武なトルコ系の民であつた。唐書には「北庭の西北、金山の西にあり、僕固振水に跨り、多怛嶺を包む」とあるが、僕固振水はタルバガタイの東の闊布克(和傳克)河、多怛嶺はタルバガタイ山脈に比定されている。<sup>(五〇)</sup>同じく唐書に「三族當東西突厥間、常視其興衰、附叛不常也。後稍南徙、自號三姓葉護。兵彊、甘於鬪。庭州以西諸突厥皆畏之」とあるが、九八二年前ころペルシャ語で書かれた地理書「Hudūd al-'Alam」にも「昔は、カルルック Khalukh の王たちは Jabghūy とも

Yabghu とよまばれていた」とある。<sup>(五一)</sup>ただし、この書にはそちこちに「カルルックの七部族」というような言葉をつかっている。<sup>(五二)</sup>またカルルックのあるものは狩獵民、あるものは農耕民、あるものは牧人であるといっているが、<sup>(五三)</sup>これは、後になってこの部族がもとの西突厥の本據地までひろがった時代の状態である。更に「好戦的で、掠奪を好む」ともしている。<sup>(五四)</sup>タラス河の戦の後には突騎施を壓倒し、西暦七六六年頃には碎葉やタラスを占領するに至ったし、タバリーによれば、その一部はアム河の南、上トカラ地方に住んでいた。<sup>(五五)</sup>バルトーリドによると、現代になってもアフガニスタンの北部にこの名をおびた部族がいるという。<sup>(五六)</sup>

タラスはその名を負う河の西岸にある町で、アラブ人は Taraz と呼び、ブレットシュナイダーによれば、六世紀のビザンティン帝國の記録にも見え、後世のアウリエ・アタ *Aulie Ata* の北にあたる廢墟こそその遺跡であるという<sup>(五七)</sup>が、現在の地圖にはタラスという町がのせてあり、<sup>(五八)</sup>この附近でソ連の考古學者の大規模な發掘も行われたらしい。<sup>(五九)</sup>

玄奘は「千泉より西行すること百四五十里で咀邏私城に至った。周八九里、諸國の商胡が雜居している云々」といい、そこから南行十餘里の所に三百餘戸の小城（城郭町）があるが、住民はもと中國人で、衣服去就は突厥風だが、言葉や儀範はなお中國のものを残していると傳え、そこから六百五十里で赭時（*Shash*、石國）に至ったとも述べている。<sup>(六〇)</sup>アラブ地理書にも、この町のことを記すものが少くない。例えばイブン・ハウカル（十世紀後半）は「ここはイスラム教徒がトルコ族と取引するところで、後者との間には、イスラム教徒の築いた城壁があり、ムスリムたちは、そこから向うへは出て行かない。何故なら、そこを越えるとカルルック可汗の領地になるから」と云っている。<sup>(六一)</sup>ムカッダシー（十世紀末）も、この町は堅固な城壁や濠にかこまれ、近郊には田園がひろがり、人煙が濃かであるとしている。<sup>(六二)</sup>一三五三年にモンゴルの大汗を訪ねようとして、ここを通過したルブルックのギョーム（ウイリヤム）は、そのあたりは園



のように水の豊かな平原で、南方には険しい山脈が聳えていたと述べている。<sup>(六三)</sup>それが通鑑に白石嶺と呼ばれたアレクサンドロフスキー山脈であろう。それはまたタラス河の水源でもある。舊唐書(一〇九)李嗣業傳には唐軍の潰走の状をのべて「……仙芝大敗す。たまたま夜となり、兩軍解く。仙芝の衆、大食の殺す所となり、存するもの數千に過ぎず。事窘<sup>セマ</sup>る。嗣業、仙芝に白して曰く『將軍深く胡地に入り、後は救兵を絶つ。今、大食戰勝す。諸胡知らば、必ず勝に乗じて力を并せ漢<sup>ソム</sup>に事かん。若し全軍没し、嗣業、將軍と俱に賊の虜うる所とならば、則ち何人か歸りて主に報ぜん。しかず馳せて白石山嶺を守り、早く奔逸の計を圖らんには』と。仙芝曰く『爾は戰將なり。吾は餘燼を收合せんと欲す。明日また戦い、一勝を期さんのみ』。嗣業曰く『愚者の千慮も或は一得あり。勢危きことかくの若し。膠柱すべからず』と。固く行かんことを請う。乃ちこれに従う。路隘く、人馬魚貫して奔る。たまたま跋汗那<sup>フエルガーナ</sup>の兵衆先に奔り、人及び馳馬路を塞ぎ、過ぐるあたわず。嗣業大棒を持ち、前驅してこれを撃つ。人馬手に應じて俱に斃る。胡等遁れて路開き、仙芝は免るることを獲たり」とある。

## 結 語

以上述べてきた如くタラス河畔における唐軍とアラブ軍の會戦は、西突厥の遺民の間に覇をとなえた突騎施族が可汗蘇祿の死後、黃黑二姓に別れて争ったとき、石國(シャージュ)がこれに干涉し、遂に唐の對突厥政策と衝突し、その討伐を受けたことから起っている。唐は決してアラブ軍を直接の仇敵としていたわけではない。アラブ軍の方もまたアム河以北諸國に對する威信を固めるために出兵したもので、唐の勢力地たる安西四鎮までを征服しようなどという意圖のものではなかったと思われる。要するに唐も大食もそれぞれ、自己の既有的の勢力地を確保するために戦うに至ったの

であるが、たまたまその勢力圏がシル河北岸の地で接觸していたために衝突を招いたものに、決して兩者にとって死活問題というような深刻な原因はなかったと考えられるのである。タラスの一戦に、これほどの大敗北を喫した高仙芝が、さしてその責任を問われることもなく、まもなく武威太守に除せられ、更に右羽林大將軍を拜し、密雲郡公に封ぜられたという事實（唐書一三五、仙芝傳）も、もしこの戦が唐朝にとって重く見られていたとしたら、よほど不可解のことである。しかし製紙法の西方傳播ということをはじめ東西文化交流の上で、タラスの戦が果たした役割はまことに大きかったと言えるであろう。このような見地からもその何故に起ったかの事情を明かにしておくことは決して徒勞のわざではないと考えている。

註一、一部分は農耕に従つたものもあつたことが考えられる。碎葉川 Suyab 附近の突厥族のことをのべて杜環（經行記）は「凡是農人皆環胄甲云々」といつている。

二、冊府元龜卷九六七。烏質勒は武平一の景龍文館記によれば烏折勒につくる。（岑仲勉「西突厥史料補闕及考證」北京一九五八年刊、頁七三）

三、Ed. Chavannes は鉢換を今の新疆省の Yaka-aryk に、大石城を同じく Aksu に比定している。（Documents sur les Toukine occidentaux, 1903, Saint-Petersbourg, pp. 8—9）

四、H. A. R. Gibb: Chinese records of the Arabs in Central Asia (Bulletin of the School of Oriental Studies II), p. 617.

五、Abū Jafar Muhammad b. Jarir al-Tabari: Tārikh al-Umam wa al-Mulūk, al-Qāhira 1939, Vol. 5, pp. 351—.

六、H. A. R. Gibb: The Arab Conquests in Central Asia, London 1923, p. 61.

七、al-Tabari, Tārikh, Vol. 5, pp. 382—383. Gibb: Arab Conquests, pp. 65—66.

八、この人物につき、バルトリードは、一説にはヤズディギルド三世の子ホスロー Khusrū とあり、イブヌル・アシルによればヤズディギルドの子ホスローの子とあるので、後説の方をとるべきだといふ考をのべている。（W. Barthold: Altürkischen

Inschriften und die Arabischen Quellen, p. 25). またギップはヤズディギルドの子ピールーズの子ホスローと解釋し、「中國史料はこの遠征について沈黙してはいるが、サーサン王家は中國に亡命したので、ホスローがその軍中にいたことは、反軍が中國の獎勵をうけていた一證ととるべきであろう」という考を述べている。(Gibb: Arab conquests, p. 71) タバリーは Khusrāu b. Yazdijird (ヤズディシルドの子ホスロー) としている。(Tā'rikh, Vol. 5, p. 403) しかし序章(頁六六八)に述べた如くマズデーイによればヤズディギルドには二男三女があり、兄がバハラーム、弟がフィールーズ(ピールーズ)であったというから、ホスローは恐らくヤズディギルド(アラブ人のヤズディシルド)の孫であろう。

九、 al-Tabari, Vol. 5, pp. 397—.

10、 Ibid, Vol. 5, pp. 408—, Gibb, Arab conquests, pp. 73—75.

11、 al-Tabari, Vol. 5, pp. 443—, Gibb, pp. 76—84.

12、 岑仲勉「西突厥史料補闕及考證」頁八八〇。

13、 同右、頁八八。

14、 趙順貞、趙歸貞(舊唐書卷八、本紀)などにつくるも、頤が正しいようである。

15、 al-Tabari, Vol. 5, p. 443.

16、 バルトーリドは「攻撃し、突っかかってくるもの、つまり象や牡牛のこと」と解釋している。(W. Barthold, Turkestan down to the Mongol Invasion, London 1928, p. 187). 猪突王とか、猛牛王などと譯しても原語の意義を失わないと思ふ。

17、 Gibb, Arab conquests, p. 81.

18、 Chavannes, Documents, p. 285, n. 1.

19、 al-Tabari: Vol. 5, p. 453.

20、 舊唐書本紀(九)開元二十七年九月の條には「北庭都護蓋嘉運以輕騎襲破突騎施於碎葉城、殺蘇祿。威震西陲」とあり、蘇祿を殺したのは蓋嘉運である如く記しているが、これは沈炳震によれば「蘇祿子吐火仙」とすべきものであるという(岑仲勉、西突厥史料補闕、頁九二)。しかしそれにしても蓋嘉運は吐火仙を捕えて長安に送ったのみであり、しかも後者は大赦されたもので、殺されてはいない。

- 三二 J. Marquart: Historische Glossen zu den alttürkischen Inschriften (W. Z. K. M.) 1898, XII. pp. 181—182, Do: Die Chronologie der alttürkischen Inschriften, Leipzig 1898, p. 38, note. 1.  
 W. Barthold: Die alttürkischen Inschriften und die arabischen Quellen (W. Radloff: Die alttürkischen Inschriften der Mongolei, Zweite Folge, St. Petersburg 1899, p. 27.  
 三三 Chavannes, Documents, p. 285, note. 3.  
 三四 の人物については、キントセ Nasaf (Kish) の支配者 al-Ishkand とシブアラフ史料で現われるものと同一人であると見て、シブアラフの流亡の民からなつた軍隊の指揮者だつたものとシブアラフを發表してゐる。(H. A. R. Gibb: Arab conquests, p. 86, note. 25)  
 三五 ガズーン女史 *gazün küll çor* を固有名語として扱つてゐる。(A. von Gabain: Alttürkische Grammatik, 1950, Leipzig, p. 317.)  
 三六 al-Tabarī, Vol. 5, p. 494.  
 三七 Chavannes, Documents, p. 285.  
 三八 Ibid, p. 285.  
 三九 岑仲勉「西突厥史料」頁九五。  
 四〇 al-Tabarī, Vol. 5, pp. 492—3.  
 四一 Ibid, p. 508.  
 四二 Ibid, pp. 461—.  
 四三 白鳥庫吉「亞細亞北族の辯髪に就いて」(史學雜誌第三十七編第四號頁三〇一)  
 四四 al-Tabarī, Vol. 5, p. 508.  
 四五 岑仲勉「西突厥史料補闕」頁九七、所引、通鑑考異。  
 四六 今日の Tarti にあたる。Hudūd al-'Ālam によればイスラム世界に近接した小さな地域で、農耕が行われているとある。  
 (Hudūd al-'Ālam, translated and explained by V. Minorsky, London 1937, pp. 97, 289)

三、岑仲勉氏は「黑姓當卽後來之 Karakalpak、卽 black caps、一七世紀末尙住吹河。參看回教百科辭典七三六頁。」と述べている。(西突厥史料補闕、頁一〇二) 回教百科辭典の Qaraqalpaq (黑帽族) の記事は、W. Barthold の執筆になるものであるが、格別にこれと黑姓突騎施とを結びつけてはいない。カラパルパクは早く十二世紀のロシアの年代記に現われ、一七世紀末に スィル・ダリア河畔、トルキスタンの町から十日程ほど下流の所にいたことが Skibin と Troshin によつて報告されて以來、時々これに關する報告が見られる。もとはヴォルガ地域から中央アジアに移ったといわれ、一八世紀末ころカザックのため、スィル・ダリア河畔からおわれたという。(Encyclopaedia of Islam, Qaraqalpaq の項) 恐らく突騎施とは別種であろう。

三、al-Ṭabari, Vol. 5, pp. 493—494.

三、Ibid, p. 493.

三、Gibb, Arab conquests, p. 91.

三、岑氏「西突厥史料補闕」頁一〇〇。

四、冊府元龜(卷一三一)によれば、高仙芝に捕えられたものうちには、石國王の妻(可敦)もあつた。玄宗は勤政樓に御し、群臣を會して、これらを引見し、高仙芝をば開府儀同三司、攝御史大夫とし、その一子に五品官を與えて功を賞したとある。

四、A. Stein: Serindia, Vol. 1, p. 31.

四、al-Ṭabari, Vol. 6, p. 112. Ibn al-Athir: al-Kāmil fī al-Tārikh, 1357 H. al-Qāhira, Vol. 4, p. 342.

四、al-Ṭabari, Vol. 6, p. 112.

四、Ibn al-Athir, al-Kāmil, Vol. 4, p. 342.

四、C. Brockelmann: Geschichte der Arabischen Litteratur, Weimar 1898, Band 1, p. 138.

四、Ibn Ṭaifūr: Kitāb Baghdad, 1949 al-Qāhira, pp. 12—13.

四、通鑑(卷二一五)天寶元年正月の條に「安西節度撫寧西域、統龜茲・焉耆・干闥疎勒四鎮。治龜茲城、兵二萬四千」とある。また北庭節度使の下にある兵力は二萬人とある。

四、Gibb, Arab conquests, p. 96.

四、岑仲勉「突厥集史」北京、一九五八年刊、下卷、頁七五八—九。

- 四一' *Hudūd al-'Ālam*, (Gibb Memorial New Series XI), London 1937, p. 97.  
 四二' *Ibid*, pp. 28, 54.  
 四三' *Ibid*, p. 97.  
 四四' *Ibid*, p. 97.  
 四五' *Ibid*, pp. 287—288.  
 四六' *Encyclopaedia of Islam*, Turks 〇頁。  
 四七' E. Bretschneider, *Mediaeval researches*, London 1888, Vol., p. 18, note. 23.  
 四八' 例 Atlas SSSR, Moskwa, 1955, 47—48, 55—56.  
 四九' *Istoriya Kazakhskoi SSR*, Almata, 1957, Vol. 1.  
 五〇' 大唐西域記卷一'  
 五一' *Ibn Ḥawqal: Kitāb šūrat al-'arḏ*, (BGA II) Leiden 1938, p. 511.  
 五二' *al-Muqaddasi: Kitāb aḥsan al-taqāsīm fi ma'rifat al-aqālim* (BGA III) Leiden 1909, pp. 274—75.  
 五三' Sir H. Yule: *Cathay and the way thither*, London 1866, Vol. 1, p. 287. note. 5.

本稿は昭和三十三年度文部省科學研究費(各個研究)による研究成果の一部である。